文学の論理

カイザー Kayser, W.
ガーダマー Gadamer, H.G.
ガーディナー Gardiner, H.A.
カフカ Kafka, F.
ガレット Garrett, A.
カレプスキー Kalepsky, Th.
カント Kant

ラッセル Russel, B.
ランガー Langer, S.
リース Ries, J.
リチャードソン Richardson
リッケルト Rickert, H.
リップス Lipps, Th.
リルケ Rilke
ルートヴィヒ Ludwig, O.
レッシング Lessing

ヘミングウェー Hemingway
ヘムステルホイス Hemsterhuys
ヘルダー Herder
ヘルマン Hellmann, W.
ベーレント Berend, A.
ベンゼ Bense, M.

ケーテ・ハンブルガー

文学の論理

植和田　光晴　訳

松　籟　社

訳者略歴

1937年　京都府生まれ
1960年　金沢大学薬学部卒業
1967年　関西大学文学部独文科卒業
1972年　同大学院文学研究科独文学専攻
　　博士課程単位取得
現　在　大阪産業大学教養部教授

文学の論理　第3版

1986年6月10日　発行　　定価はカバーに表示しています

著　者　ケーテ・ハンブルガー
訳　者　植和田 光晴
発行者　相　坂　一
編集者　中島 伸之輔

〒600　京都市下京区河原町通七条下ル材木町463
　　溝口ビル3F
発行所　松　籟　社
電話　075—351—6469
振替　東京　4—13030

印刷　亜細亜印刷(株)

©1986　　乱丁本・落丁本はお取り替えいたします

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第三版への序

この『文学の論理』第三版は、第二版（一九六八年）に比して、最終章「文学の象徴問題」を削除したこと以外は不変である。この章は、象徴概念や、それが文学に占める重要性に関する問題性を論ずるには、もはや満足できないように思われた。この章が削除されたのは、本書の主題が、論旨に決着をつけ展望を与えることを意図して書かれたにすぎないこの最終章とは、無関係だからである。

なによりもまず、一九六八年以降にも雑誌や著書におびただしく登場した、本書に関する論議に、改めて反論を加えることも断念された。これらに対してはこの場で、全体として一括して謝意を表させていただきたい。論議そのものは、それが論争的なものであれまた好意的なものであれ、本書の第三版が必要であることを保証するものであるのは、著者のよろこびとするところである。— 批判との対決を断念せざるを得なかった理由は、まず第一に、研究用の廉価版を意図した改訂版の作成に伴う技術的な面である。しかしまた、根本的にはつぎの理由からである。すなわち私が「再度 — 語りについて」（*Euphorion* 59, 1965）という論文における、批判者たちに対する、なお第一版（一九五七年）に言及した論評や、第二版で扱われた反論、修正以来、今日さらに本質的に新しい知見を付加することはできないということ、また、本書に述べられたジャンル論的な立場が、新しい

文学的現象によって妥当性を失ったとは考えられないということ、である。特に注記に譲った研究文献の検討を、今日の水準にふさわしいものにすること、あるものは削除し、またある個所では補足したりすることは、できれば願わしいことであった。これを断念せざるをえなかったのも、また、この新しい版がこうした不満を依然として残しているのも、右に述べたような技術的な理由によるものである。

K・H

シュトゥットガルト
一九七七年一月

目次

第三版への序……i
序　論　文学の論理 ― 概念と課題……1
第一部　言語理論的諸原則……9
第一章　概念構成「文学と現実」……11
第二章　言語の言表体系……22
言表の概念……22
言表主体の分析……28
言表の主体-対象-構造……33
現実言表としての言表概念……35
第二部　フィクション的あるいはミメーシス的ジャンル……45
第一章　序説 ― 文学的フィクションの概念……47
第二章　叙事的フィクション（あるいは三人称物語）……50

フィクション的語りとその徴候……50
物語的過去……53
内的経過の動詞……66
体験話法……68
フィクションの無時間性……72
歴史的現在……79
歴史小説における時間の問題……87
様式的諸相……92
空間指示詞……98
フィクション的語り――一つの(変動的)語り機能……105
言表主体の消失と「語り手」の問題……105
語りの主観性と客観性の問題……111
対話の体系……136
第三章　劇的フィクション……149
劇的フィクションの叙事的フィクションに対する関係……149
戯曲の場所……153
舞台の現実性と現在の問題……160

第四章　映画的フィクション……168
第三部　叙情的ジャンル……179
第一章　現実言表の体系と叙情詩の場所……181
第二章　叙情的主体-対象-相関関係……189
第三章　叙情的「私」の特性……210
第四部　特殊形式……227
第一章　譚詩およびこれの画像詩、扮役詩に対する関係……229
第二章　「私」-物語……242
架空の現実言表としての「私」-物語……242
書簡体小説……247
回想録体小説……251
架空性の問題……254
原注……267
あとがき……285
訳者あとがき……287
人名索引……299

序論

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

文学の論理 ― 概念と課題

この著作では、文学美学一般の領域から、一つの文学の論理学を抽出する試みがなされる。まずここでの手続きそのものが明らかにされなければならない。文学の理論的な論究は、それが文学の多様な局面のいずれにかかわっていようとも、すべて文学の美学にかぞえることができるからである。それというのも、芸術が美学の対象であって論理学の対象でなく、造形の領域に属し思惟の領域には属さないものである限り、文学の論理学を論ずるのはむだなこと、まったく混乱のもとになると思われるかも知れないからである。しかし芸術の体系のなかで文学が特別な位置を占めている点に、やはり文学の論理学あるいは論理的体系といったものが存在するというこの区別が立てられる根拠がある。

このばあい文学の論理学という概念は、いわば間接的な意味で理解されなければならない。この概念は、言語の論理学が存在している、あるいはより正確にいえば、言語論理学なる概念が思惟の論理学に関する近代的意識に定着しているがゆえに、有意義かつ正当である(1)。この用語では、言語論理学は思惟論理学あるいは事象論理学の、言語への関係を意味することができる。しかもJ・S・ミルがすでに定義しているように(2)、「思惟の最高の補助手段、道具として」。E・フッサールはそれゆえ「論理学を言語的論究から始める」(3)必要性を確認している。また、いっそう包括的な意味で、言語をその能力に基づいて検証すること、思想一般を白日のもとにさらすことがL・ヴィトゲンシュタインの問題である。それゆえ彼にとっては、哲学(単に狭義での論理学ではない)は、「言語批判」に還元されるが、言語批判それ自体は言語論理学である。そのさい、ヴィトゲンシュタインは、思想を装っている日常語から直接的に言語論理学を抽出することはできないことを強調している(4)。

つまりここでは終始、言語論理学が言語の批判として、言語の ― 文法的あるいは言語学的 ― 表出機能の観点から把握されている。すなわち「思想」をも思惟の法則をも表現する言語の能力の観点から。たとえわれわれがこの意味で文学の論理学を論じてみても、文学の問題は当然最初から欠落していることになろう。文学の論理学はたしかに文学の、言語への関係をねらってはいるが、右に述べた諸理論が意図するのとは別の関係をめざすのである。文学の論理学は、記述的、表現的機能において言語を考慮するのではなく、ひいてはまた文学は言語芸術という意味での言

葉の芸術であるという、多かれ少なかれ月並みな事実を考慮するのでもない。文学の論理学はむしろ文学の形成素材としての言語が、同時にまたとりわけ人間的な生一般がそこに営まれている媒体でもあるという事態から展開される。これはけっして新しい知見ではない。例えばヴィルヘルム・シュレーゲルが「詩（Poesie）の媒体は、それによって人間精神一般が意識に到達し、その精神の諸表象を意のままに結合する当のもの、すなわち言語である」(5)と述べているのは、これを定義しているのである。しかしこの定理にはすでに、文学の媒体が意味を刻み込まれた記号・語から成立していることのみではなく、この媒体ははるかに徹底的に文学を特別な芸術存在として決定しているということも暗示されている。文学の論理学あるいは文学の言語論理学は、それゆえ、ヴィトゲンシュタインの意味での言語批判ではなく、より正確には言語理論と称されるべきもので、これは(さしあたってはなお一般的に、述べておきたい)文学の諸形式を生みだす言語は、われわれが思考し伝達する生活の言語と機能的に異なっているかどうか、またそれがどの範囲でそうなのかを研究する。文学の言語理論としての文学の論理学は、文学の一般的言語体系への関係を対象とする。したがって文学の論理学は言語理論的な意味で理解されるべきであり、そのさいここで意図されている言語理論は、以下においては言表理論として展開される。そしてこの理論の解明が進むにつれて論理学という用語に代わって言表理論という用語が用いられるようになる。

古今のさまざまな文学理論が十分に満足できる結果に達していないように思えるのは、この事実、すなわち、一般言語理論への文学の関係が、それ自体十分厳密に把握されていなかった、あるいはいずれにせよその関係から最終的な結論が引き出されていないからである。これが行われて初めて、文学が限定困難な芸術領域であり、それどころかヘーゲルが認めたように、「そこにおいて芸術が解体しはじめる特別な芸術」であるという、本来の、文学にとって特殊的な現象が明るみに出るのである。そしてわれわれはヘーゲルのこの洞察の根拠がどこにあるか、もちろん彼自身によっては引き出されなかったいかなる結論がそこから出てくるか、ということをほどなく知るであろう。それというのもこの知見を真剣に受けとめれば、その方法的な価値がみえてくるからである。それは文学の隠れた論理的組織のなかまでも照らす。この組織によって文学は一般的思考および言語の諸事象の組織と関連しまた逆にこれと区別されるのである。しかしこの構造を明らかにするさいに、特異な、しばしば驚くべき現象が明るみに出る。とりわけそこで明らかになるのが、詩学の、諸ジャンルの中心的な問題は、これらのジャンルが過去においていかに多様であり、また現在もなお多様であるにしても、従来なじみのも

のとは異なる局面、異なる秩序原理の下に表される、ということである。古典詩学の拘束から脱しつつあったゲーテが、叙情詩、叙事詩および戯曲を三幅対の「自然形式」と称し（西東詩集への注記および報告）、これらがけっして伝統的な諸ジャンルに縛りつけられたものではなく、「しばしばきわめて短い詩のなかで」さえ作用し合っていることをみてからというもの、とりわけ近代詩学には、この解釈が採られている。こうしてエーミール・シュタイガーは、伝統的形式概念から、叙情的なもの、叙事的なもの、劇的なものを、想起、表象、緊張として、つまり心的な基本姿勢として溜出したとき、詩的なものの新しい解釈可能性を手に入れたのである。また彼に先立ってすでにローベルト・ハルトルが、諸ジャンルを「情緒の能力」、感情、認識・欲求能力という体験形式に還元していた。

これらの定義はすべて、詩的なものの微妙なニュアンスをそのままに把握できるとはいえ、それ自体、結局は既存のジャンル現象の解釈にすぎない、つまりこの解釈は固定した諸ジャンルを体験形式あるいは表現形式へと溶解することによってこそ可能となったのである。しかしながらこの諸ジャンルはやはり固定した形式であって、こうした形式として最後まであらゆる解釈、あらゆる意味の読み替えに抵抗する。詩、小説あるいは戯曲を読むとき、われわれはこのことを直接に経験する。当の小説がいかに叙情的な気分を与えても、また当の戯曲がいかに「叙事的」に広がりのあるプロットをもつものであり、当の叙情詩がいかに「非叙情的」なものであれ ― それらは依然として物語文学であり、戯曲でありまたわれわれの読み体験を支配し刻印する叙情詩である。作品の呈示する形式が読みを方向づけ、読み体験を調整する形式である。それは例えば、歴史の著作や自然科学の教科書が小説とは異なる理解をうけるようなものである。われわれは叙情詩からは、小説や戯曲を読むのとはまったく異なる読み経験をもつが、この相違がはなはだ大きいため、小説、戯曲の体験は、叙情詩の文学体験と同じ意味では体験といえないし、その逆もまたそうである。すでにこの前論理的な考察のなかに、われわれの体験では、物語と戯曲が叙情詩に比べて互いに近接していて、叙情詩は、われわれの表象行動領域のなかにあって、他の二つのジャンルとはまったく異なる位置に存在していることが暗示されている。

これまでジャンルの詩学や個々の文学作品の解釈には、物語および戯曲は読者にフィクション体験あるいは非－現実の体験を媒介するが、他方叙情詩のばあいはそうでないという事実は含まれていなかった。しかし体験として伝えられることは、伝達する現象自体のなかに体験の原因をもっている。この現象とは叙情詩、叙事詩、戯曲であり、またこれらの各ジャンルに属する個々の実作品すべてのことで

ある。叙事詩、戯曲が非現実の体験を、また叙情詩が現実的体験を伝達する原因は、論理的構造、さらにまたそれらの根底にある言語的構造のほかにはない。文学の論理学はしたがって文学の現象学でもある。ここでいう現象学の概念はヘーゲルやフッサールの現象学のもつ特別な意味を負わされてはいない。ここで現象学というのは諸現象そのものの記述というに等しい — さらにまた単に記述的というのでなく徴候的(symptomatisch)記述方法という意味においてであり、ゲーテの言葉に従えば諸現象が規範(Lehre)であるという、その規範の意味での現象記述である。「現象の背後に何かを探ってはいけない。現象自体が規範である」(『箴言と省察』G. Müller 版第九九三項)としてゲーテは諸現象の背後を探ることを拒絶し禁止したが、彼は、「現象の背後を探る」ことによって、現象自体からは引き出しえない意味、自然現象から自然哲学を、また歴史的現象から歴史哲学を構想する何らかの形而上学的な意味を、この現象に挿入することになり、一つの客観的な学問、ゲーテの言に従えば、一つの理論を作ることにはならない、ということを言おうとしたのである。しかし現象が規範であるということのなかにすでに含まれている意味賦与があって、ゲーテもまたこのような意味賦与においては現象の背後を探ることを認め、また実際にそれを行った。それというのも、現象が規範であるというのは、現象としての現象は同時に徴候であるからであり、現象に特有の「かくあること」あるいは「かく現象していること」は、現象そのもののなかにある、一つあるいは若干の原因にまで溯行し降りてゆくことを指示するからである。この原因が現象の「かくあること」「かく現象していること」を条件づけている。この原因には、隠されているためにめだたぬこともありうること、それゆえ現象を記述するさいにその原因をまったくそれと気づかないといったこと — ゲーテはこのことをもつぎのように簡潔に明言している。「現象は根拠のない結果、原因のない作用であるといわれるのは正当である。根拠や原因を見いだすのは人間にとってきわめて困難である。それらはきわめて単純であるために眼差しから隠されているからだ」(第一一〇三項)。自然科学は方法的にはこの認識がとるのとまったく同じ手続きをとる。自然科学は諸現象が示している徴候の原因を探り、これらの原因がある法則、法則性、構造をもって存在していることを見いだすまでは気がすまない。われわれはここでは、精神科学も法則的科学であるのか、またどのようにしてそうなのかという、広範かつさまざまに論義された問題には触れない。われわれはただ文学の現象を見据え、これが言語そのものと同じようにきわめて徴候に富んだ諸現象に属することを示してみたい。これらの諸現象の「かくあること」あるいは存在様態は、偶然的ではなく、またそのようなも

のとして記述されさえすればよいというのではなく、言語の芸術、あるいは言語からの芸術として、その根底にある隠れた論理的構造から説明され、解明されなければならないのである。

この論理的構造あるいは法則性は、創作中の詩人自身には意識されていないが、それはわれわれが考えたり話したりしているさいに、われわれが他人に理解されるためにはそれに従わなければならない論理的法則を、意識していないようなものである。しかしこれらの法則は、いったん発見されたとなると、文学解釈者の手に、いくつかの隠れた扉を開ける鍵を手渡すことになる。この扉の背後に文学の創作過程の、ひいては文学の諸形式自体の秘密が隠されているのである。われわれはこれから言語の芸術として文学を分析しようとするが、ここで再度強調しておくことは、言語は「詩的」言語、「言語芸術作品」という狭義の美学的意味にではなくて、創作する言語として文学に関連して理解されている、すなわち、言語が文学の諸形式を生み出すさいに言語を支配している、言語論理学的な諸機能に関して研究されるということである。

しかしこれには ― あらゆる誤解を避けるためにとくに強調されなければならない ― 文学という概念も美学的には最広義に、すなわち肯定的および否定的な意味で理解されるべきであるということが含意されている。つまり言語は、それが単に新聞小説、オペレッタの脚本、最上級生徒の詩を生み出す結果となるばあいでも、やはり創作的である。それというのも創作的言語過程の論理的諸法則は、その過程によって生み出された諸形式において、美的な意味での「芸術としての文学」という概念が満たされているか否か、ということには左右されないからである。ここでは論理的諸法則が絶対的であって、美学的法則は相対的である。前者は認識の対象であり、後者が評価の対象であるのとは異なる。このことはしかし、論理的構造関係の認識が美的評価に有効であることとは抵触しない。ただそれにより芸術の体系において文学の占める場所は、言語の、同時にまた思惟の体系における文学の場所により条件づけられていることが、いっそう明確になってくるのである。

第一部　言語理論的諸原則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.